



Title	ワークショップへの感想文① 倫理学者という「権力者」になるにあたって
Author(s)	中村, 達樹
Citation	臨床哲学ニュースレター. 2022, 4, p. 117-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86367
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集3 「〈応用〉することの倫理——緊縛シンポ、ブルーフィルム、ジェンダー」

ワークショップへの感想文①
倫理学者という「権力者」になるにあたって

中村 達樹

このWSに参加する2年ほど前、私は学部の卒業単位を揃えるために所属機関で社会調査法の講義を受講した。その中で度々述べられていたキータームの一つに「書き手の権力性」があったことを鮮明に記憶している。「学者」としての書き手は、原理上は当事者の語りをいかようにも書き換えることが可能な立場にあり、逆に当事者は書かれたものを容易に訂正できる立場にない。このような権力性の自覚は、社会学や文化人類学の分野においては、我々専門外の学部生が講義で何気なく耳にできるほどにまで定着しているし、今回の登壇者の奥田太郎氏、発表中で名前の挙がった神崎宣次氏といった（私自身の大先輩にあたる）方々により、倫理学の分野においてもその重要性が唱えられてきた。

倫理学者は社会学者・人類学者以上に権力性を持った立場かもしれない。というのも倫理学はその本質からして、当事者の実践を追認するだけでなく、評価し、禁止し、変容させることも時に要請する。ローカルな現状の把握に終始して、規範に関して口をつぐむことは容易ではない。しかもその手段として、功利主義やカント主義などの強烈な普遍化可能性を有し、個別的な感覚や直観の側の修正を迫りやすい規範言説が扱われる場面も多い。そういう意味では、倫理学者は他のどの書き手よりも権力性を持たざるを得ない立場にあるかもしれない。

そのような「書き手の権力性」の問題を改めて再認識するに至った事が、今回のワークショップであった。修士課程への進学を既に決定している私自身、遠からぬうちにそのような「書き手」となる機会を手にすると思われる。たとえ社会における金銭的待遇の面では「弱者」の側に回りやすい立場であっても、言説の真理性・妥当性の認められやすさという面では十分に「権力者」の立場にある者として、一方で自身の研究に関わる当事者の方々を尊重すべきでありながら彼らに盲従すべきではない者として、今後いかなる態度を取るべきか。今回のワークショップは、そのような他人事にはできない問題意識を再燃させるきっかけとなつた。

(なかむら・たつき)